

法華經玄贊の古點について

春日政治

一

石山寺旧蔵の点本法華經玄贊を、今春図らず東京で見える機会があつて、十余年昔この經を調査したことを追想して懷かしさに堪へず、家に歸つてその古い調査資料を引出して見る氣になつた。この点本は大矢透博士の仮名沿革史料にも、古い部分の主要資料として載つてゐることは学界周知のことであるが、自分はいづい昨冬或物に大矢博士のこの經の部分に、読誤りのあることを指摘したことがあつたりして、かたがたこの際この点本についての片鱗を書いて見たい氣持をそそつたのである。

自分は昭和九年十一月に、一往この古經を見たのであるが、大矢博士の後を追つてその実物が見たかつたのであつて、只短時日に於ける所々の抜書きをしたに過ぎず、それも多くは仮名訓のついてゐる個所のみであつて、全文に亘つた詳細な調査ではなかつた。只目を異にして見ると、愚者にも一得であつて、多少かの沿革史料を補訂し得る收穫はあつたやうに感ずる。

二

法華經玄贊は唐の慈恩寺親基の著であつて、法華經を唯識の立場より註解したものである。全部十卷（本末に分けて二

十巻にした本もある）であるが、石山寺にはその三・六の二巻が残つてゐて、共に同一人の手で施した白点をもつてゐる。何の識語も見えないが、仮名字体の特異点から大矢博士の推定によつて、石山寺内供淳祐（八九〇）の施す所とされてゐる。恐らく遠くない推定であつて、少くとも天曆期の資料としてよいであらう。

先づ用ゐてある仮名字体については、大体仮名沿革史料に任せてよいが、多少の修正を要する。ケの下の小はシム（令）の略符であり、セにはセの字体があり、ニの字体はてが正しい。又ユにはゆの草体が見える。実字の略符にはかの表にある上に、尙

ケシム 人ヒト 牛モノ 石トコロ

等が見える。因みにこの点の仮名には重点（をどり字）がなく、同一字の重なる場合も皆繰返して正画に書いてある。一種の特徴ともいへる。

大矢博士の仮名沿革史料には、石山寺藏經から、淳祐内供の親筆として、略述金剛頂瑜伽分別聖位修証法門經を、同人補筆として蘇悉地羯羅經略疏（天曆五年点）を掲げ、次にこの經を並べて、三者の間の仮名字体の似よりを示されてゐるが、内には、

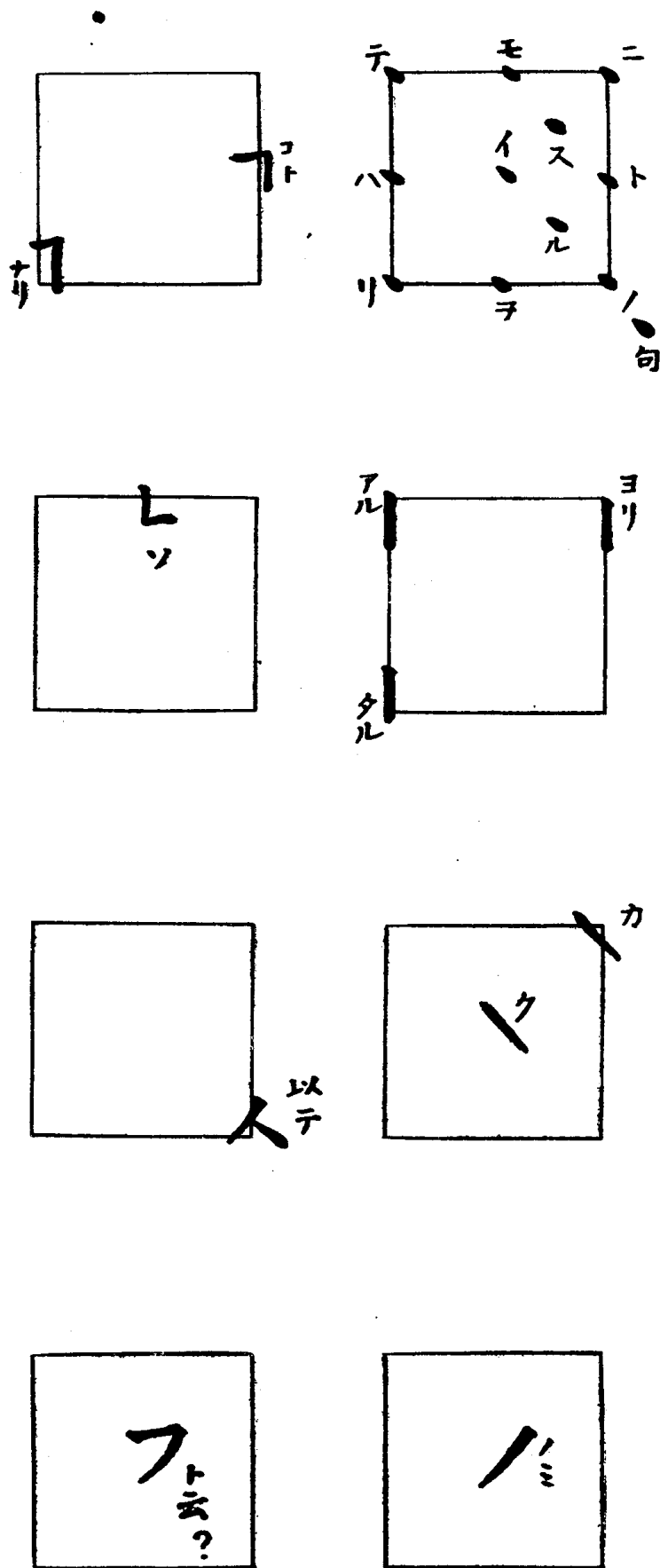
イ（サ） 丁（ス） 七（タ） 十（ツ） ス（テ） 小（ナ）
て（ニ） ラ（ホ） し（ラ）

などの極めて特異な字体のあることは、自分がかつて「片仮名の研究」
国語科学講座 昭和九年七月 に於て述べたことである。これらの
字源の考も同書に試みたから、ここには省くことにする。

次にヲコト点は沿革史料にはないが、自分の摘書から歸納したものを次に掲げる。

但しこの調査は甚だ疎略であつて、不完全はもとより、不明な点もあり、誤謬もあらうから、精細に調査された方からの補訂を乞ふものである。さてこの点法は後世の点譜に比較して見ると、順眺和尚点といふものに最も近く、星点のかぎりでは殆ど相合ふもので、尙ナル・タル・ヨリ・カ・コトの如きは全く一致するのみならず、形は異なるがソの位置も同じである。勿論後の順眺点よりも極めて簡単であり、ヲコト点として比較的早いものであつて、恐らくその祖点とも見るべきものである。前述の蘇悉地経略疏は詳しく調べなかつたが、これと同一の点らしい。

ここで右の仮名字体とヲコト点とによつて、本文を訓読した一例を示すことにする。試みに沿革史料の「一部分影摹」



の部を仮名交りに書下して見る。(注意、漢字の右側に附した仮名訓は原点にあるもので、左側につけたものは自分の推読である。)

唯苦痛シト号ビ叫ブ(之)声ノミヲ聞キテ、衆生有リト知ルナリ。又鉄の箕ヲ以チテ、三熱猛焰ノ鉄ノ炭ヲ盛レ満テテ(而)簸揃フ(之)。復熱鉄地上ニ置キテ、大熱鉄山ニ登ラ令メ、上ゲテ(而)復下シ、下シテハ(而)復上ス。其ノロノ中ヨリ(從)、其ノ舌ヲ拔出シ、百ノ鉄ノ釘ヲ以チテ、釘チテ(而)張ル(之)。皺ミ榧レルコト无キコト、牛ノ皮ヲ張ル如クアラ令ム。復更ニ仰ニ卧リテ……。

因みにこの仮名訓ヒソロフのヒはヒルといふ上一段活用の動詞の連用形である。意味は箕を以てあふぎ分けることで、地方には現代でも残つてゐる語である。榧字は衣の襞積とあつて、これをツヅマレルと読んだのは、シジマル・チヂマルと同じである。法華經單字に縮字をシジムともツヅムとも読んだのと同じである。

三

この点に表れた音韻について考へる。仮名にア行のエを缺いてゐるが、ヤ行のエの用語が正しくあり、淳祐の蘇悉地經略疏には明かに二つのエが區別された字体で表れてゐるから、これも區別があつたと見てよいと思ふ。

音韻について殊に注意すべきは音便のことである。これは沿革史料にも示されてゐるが、イ音便・ウ音便・撥音便が見えてゐる。東大寺諷誦文稿にワキワキシ(了々)とある形容詞が、この点ではワイワイシとなつてゐる。このキのイと変る類は音便のうちで最も早いといはれるもので、勿論これより以前のものに見えるものである。形容詞の連用形クのウとなるものは、古今集時代には見えてゐるが、この点には「健ウテ」といふ例がある。延ばしてウとなつたものに「施ケテ」があつて、無論設字の訓と同一であるが、金剛般若經集驗記古点(黒板本)と共にマクのマウクになつた古い一例である。

次に撥音便に

臭烟繁クサカ鬱ナリ。

烽火ノ（之）ミカサ烽ナルゾ。

の例がある。サカリ・ミサカリが共にナリにつづいて、リを撥音化したのである。

地獄甚多ニナナム。

或ハ一切ノ世間ノ（之）仏種ヲ断ツニモナヌ。

これらもナリがナム・ヌにつづいて、同じく撥音と化したものであつて、前例と共に、下のナ行音（子音n）に同化する現象である。まだ撥音表記の出来なかつた時代でその省かれた形になつてゐるが、これも自分の見た最も古い例である。

マ行音の撥音化する例でないかと思はれるものに、

其ヲシテ固ニネムゴロ一乗ヲ説ケト請ハシムト……。

といふのがある。地藏十輪經元慶点（八七七）にはまだネモゴロニ（慇）とあるから、これもこの頃から撥音がかつたのではなからうかと思はれる。

さて字音については、仮名書きが少くて、

堆タイ 擾ゼウ 疋ガ（雅字）

などに止まり、類音字で表したのも極めて稀であつて、「璞白也」などだけしか書取つてないから、別にいふべきこともない。

尙語彙のうちに、近代常用語と発音の異なるものもあるが、多くは古音の変化せずに保たれたものである。

侮・陵アナヅル（字鏡などには已にアナドルともなつてゐるが、平安朝の物語類までアナヅルがある）

蠶タチガミ（字鏡・和名抄同訓）

連綿・蔓ホビコリ（万葉集にある古形）

獺ヲツ(和名抄・本草和名同訓)

これらは古語の音形を見ることが出来るものである。

四

次に語彙についてであるが、先づ沿革史料の摘要の欄に見える書誤りを訂正して置く。

誤

貞存 マタキゾ

健 タケホ

塗漫 ヒヂリコ

相也 タミルナリ

楂掣 ツカミヒキ

脊胎 セナカハレ

小来 ワカキトキヨリ

自安意 ナニ

諧 コムロミ

正

貞^{〇〇マタ}ハ存^マキゾ (貞は女貞ともいふ
木の名ミヤツコギ)

タケウ(テ)

ツチ^{〇〇} ヒヂリコ (塗をツチ
とよむ)

タスクルゾ

ツカミヒク

セナカハラ

ワカキトキヨリ (コノカ) タ

アラシム?

諧委^{〇〇}コロシラヒ?

この経の本文には古い字典類を引いて、文字の音義を説いたものが多いから、この点甚だ興味深いものがある。今その
数例を出す。

爾雅ニ云ハク、猶^{ユササヒ}ハ兜ノ如ク、善ク木ニ登ルゾ。郭璞ハ健^{タカ}ウテ樹ニ上ルモノゾトイフ。
慢ハ(者)玉篇ニハ易也、輕^{アヤシ}ミ侮ルゾ(也)。不畏也。或ハ嫚ノ字ト為シ、切韻ニハ欺^{アヤマチ}ヲ謾ト為シ、緩ヲ慢ト為シ、

己ヲ恃ミテ他ヲ^ツ陵リ、高拳スルヲ相ト為ス。

爾雅ニハ蝮ハ^{ナメク}虺^チリテ博サ三寸ナリ。首大クテ^{コシ}擘ノ如シ……。色^ク綬ノ文ノ如ク、間ニ^{タチ}蠶有リ。

狐ノ音ハ扈都反、玉篇妖ス^ヲ獸ゾ、鬼ノ所乘ナリ。……能ク木ニ^ツ縁ヒ、危巖ト高木トニ^ス（於）巢フ。

爆ノ音ハ博教反、火ノ深烈ナルゾ（也）、又普駭反、説文ニ^ト灼ゾ、謂ハク披散^ミレ起ツゾ。

玉篇、抄ハ^{カス}掠ムゾ（也）、強ヒテ物ヲ取ルゾ（也）。

估ノ音ハ公戸反、字書ニハ此ノ字无シ。唯爾^ガ疋ノ郭璞ノ音義ニ、釈言ノ中商賈ノミ此ニ作レリ。切韻ニハ估ハ市ニ^モ税スゾ（也）。

右の例の中に見える語彙、ヲヤス（妖）・モヤス（税）等については、かつて「石山の石から」九大國文学会誌、昭和十年二月、で言つたことであるから省く。カスム（掠）の古く四段活用であることも、屢々自分の言つたことである。トブヒ（灼）なども古い語彙であり、ツタフ（縁）・クミ（綬）などは今の日常語に残つてゐるが、スマフ（巢）は今日ならばスクフといふ所であらう。ナメクヂリテ（虺）はたしかにさう読ませてあつて、虺字を蝮の動作として用ゐたらしく、ナメクヂをナメクヂリともいふから、もとこの動詞から來た名詞かも知れない。

終に注意すべき語彙二三を附記しておかう。

モコヨフ（屈曲）

宅ノ中ニ周匝シテ障有リ、屈曲トモコヨヒテ^{ナホ}堪ルコト難シ。

「委蛇」をモコヨフと読むことは普通で、蛇などのウネウネすることにいふが、ここは室中を通りぬけるに曲り曲りすることはいつてある。堪字（一本には越字に作つてある）をナホルと読んだのも普通でないが、通りぬけ得る義に取つたのであらう。本文の「屈曲」にはモコヨヒと仮名づけてあるが、曲字にトとテとの点があつて、それらを落さず読むと、前掲のやうにいふより外なく、これは文選訓みをしたのではないかと見られる。他にかかる例は見当らなかつたが。

ワイワイシ(了)

この訓については、自分が最勝王経古点の研究にも書いて、この経の例を引用したが、ワイワイシを「易解」の訓としたのはどうも誤らしい。かの際は軽く大矢博士の読方によつておいたが、よく見なほすと、仮名訓は了字につけてあるし、(東大寺諷誦文稿にも「了了」を読んでゐる)「易解」にはアラシムトといふヲコト点がついてゐるから、ここは、諷ニ了シクテ、解リ易クアラシムト……。

と訓むのが正しいらしい。この機会を以て訂正しておく。諷誦文稿時代にワキワキであつた語が、この経に音便化して表れるのも注意すべきことである。この語は書紀の古訓などには見えるのであるが、後世に残らなかつたやうである。

ヤワフ(癰)

又氣^ヤセ^ヤ癰^ヤヘリ。

と読んだ文がある。癰字は瘡也で普通ヤスと訓ずる。ヤワフはその同義で珍しい訓である。かの新撰字鏡を見ると、「礪确」の一訓に「也和戸留所也」とあつて、ヤワフといふ語が見える。「礪确」も亦「瘡薄地也」とあるから、土地の瘡せたのにいふ。ヤワフが瘡せた義であること明かである。饑・飢・餓等にヤワシといふ訓があるが、ヤワフはそれと同根の語であつて、一方の形容詞がウエル義であり、一方の動詞がヤセタ義となる。意義にはやはり共通点がある。自分がかつてヤワシといふ形容詞について書いたことがあつて、古訓語彙小攷(文学研究、昭和十八年六月) 其の際はまだヤワフといふ語を知らなかつたが、この度その論に補ふことが出来た。

五

語法のことなど多少いひたいが、長くなるからここでおくことにする。只この点にはまだイといふ主格助詞があり、勿論敬語法も存することだけを附言しておく。

最後に自分のこの調査は、已述のやうに疏略な摘書を巡つたに過ぎないから、見誤つた点もあらうと思ふ。切に識者の斧正を待つものである。尙この敘述に於て大矢博士の沿革史料の誤謬を若干指摘したのであるが、かかる微細な失過の故に、博士のかの著を軽重するが如き妄見のなからんことを切望するものである。点本の研究が異体の仮名や煩雑な点法を以てした資料を取扱ふものである以上、その調査に多少の見誤りを伴ふのは自然であり、況や博士の創始されたこの新しい仕事に於て、あれほどの広汎な資料に亘つたそれに於てをやである。（昭和二八、六、一稿）

— 本学講師・九州大学名誉教授・日本学士院会員・文学博士 —